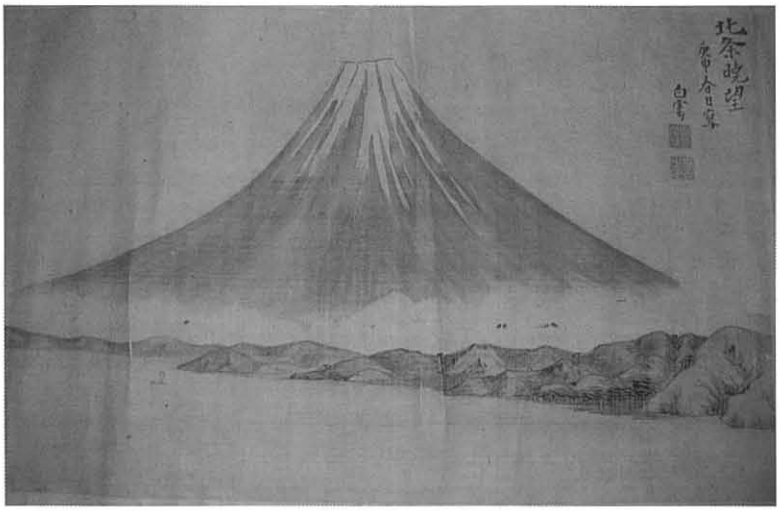
博物館アラカルト㉓

●白雲画　北条眺望図



北条眺望図（白雲画）

黄葉夕陽文庫の「楠亭諸子絹本画巻」の中に含まれた一枚の画「北条眺望図」。白雲(1764～1824)という白河城下の常宣寺住職であった画僧によって描かれたものです。

白雲は，江戸時代後期の寛政～享和年間(1789～1804)を中心に白河藩主松平定信や江戸画壇の大御所である谷文晁の指導のもとで，写実的な風景画である「真景図」作品を多く遺したことで知られる画僧です。白雲は画号で，良善，逸誉上人という浄土宗の僧侶名があり，白雲のほかには閑松堂，松堂などの号があります。常宣寺のほかにも須賀川十念寺，白河東林寺（廃寺），秋田六郷本覚寺などの住職も務めています。

白雲は，同じく白河藩の画人であった大野文泉と寛政12年(1800)に神辺を訪れています。訪れた目的は，藩主松平定信の『集古十種』の調査のためで，前年の第1次調査に続き，この年は第2次の山陽・四国方面への調査でした。『集古十種』とは，様々な文化財を集めた古文化財目録で，定信は模写や拓本をとるために全国各地へ調査員を派遣しました。
白雲と大野文泉もそのメンバーだったのです。菅茶山の日記「略歴日記」には，4月19日に二人がやってきたこと。そして，この「略歴日記」と画数枚をくれたことなどが記されています。

そこで，この「北条眺望図」ですが，「庚申春日写」ですからこの4月19日より前に描かれたもので，おそらくこのときにもらった画のうちの一つであろうと考えられます。

「庚申」は寛政12年で，前年の第1次調査に続いての第2次調査に出かける前ということになります。

北条は，三崎港のある三浦半島の先端あたりの湾のことで，そこからの富士山の眺望を描いたものです。白雲は富士山の真景図を多く描いており，田子の浦や倉沢からの眺望なども描いています。

この時，茶山はまだ富士山を見たことがありませんでした。この絵と二人の話から富士山を見たいという気持ちが湧き上がったことでしょう。

その思いがかなうのは，文化元年(1804)に初めて江戸へ行く途上でした。その富士山の姿に茶山は何を思ったのでしょうか。

（主任学芸員　岡野将士）